

\*2月28日局編集、

\*3月06日・第197回・第1と第2コーナーで放送

\*題名「ロシア残留孤児第1号のニーナさん60歳と再会して」

## 1、前AN

今日のはじめは、福岡県筑紫野市に住んでいて福岡デザイン専門学校の理事長兼校長のかたわら、九州ウラル友好協会の会長で私の弟でもある副島浩・65歳の話です。私の弟は、2年前にロシアのエカテリンブルグでテレビに出演したのがきっかけで、ロシアの残留孤児第1号と認定されたニーナさんを発見し、昨年11月25日から15日間の予定で中国残留孤児と共に60年余の異国での厳しい人生を経て、初めて祖国日本を訪問する機会をつくりました。

「ロシア残留孤児第1号のニーナさん60歳と再会して」と題して、兄の副島茂66歳が自宅で話を聞きました。

## 2、本番

Q1、まず最初に、ロシアとの関わりはということからだったの。

A1、ロシアとの関わりは、私は技術者なのでロシアの基礎技術、様々な方面の技術については深い理解を持っているつもりです。そういう事もあって、私は三菱電機に在職の時からモスクワに出掛けて、モスクワの軍事研究所、工場等を回り様々な問題についてディスカッションしたのが、ロシアを訪問する最初のきっかけになった訳です。

Q2、では、「九州ウラル友好協会」を設立したのは、どんないきさつからだったの。

A2、最初にモスクワを訪問した時に、向こうの市民レベル、社会基盤がしっかりしていることにき気付きました。それまでのロシアについての報道は、今にも国が滅び去るような状況が報道されていたので意外に思ったのです。それで、帰国してから様々なロシアに関する文献を読みあさりしました。その中で「ロシアに架ける橋」という本を読んだときに、ロシア全土に20から30ヶ所位「日本文化センター」、これは日本のODAの費用で運営されているらしいのですが、があることを知りました。その中でもエカテリンブルグの日本文化センターが、一番充実していると書かれてあったので何処だろうと地図で調べたら、なんとロシアから1800キロも離れたウラル山脈の南の端にあったのです。